



TITLE:

Paris Parasite Parodie: 『固定観念』のフォルムを読む(続編)

AUTHOR(S):

石田, 靖夫

CITATION:

石田, 靖夫. Paris Parasite Parodie: 『固定観念』のフォルムを読む(続編). 仏文研究 1989, 20: 99-112

ISSUE DATE:

1989-09-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/137750>

RIGHT:

Paris Parasite Parodie

——『固定観念』のフォルムを読む（続編）¹⁾——

石 田 靖 夫

古典作家とは連想を隠蔽する、乃至は、消し去る作家のことである²⁾。

ヴァレリー

だから物語には、ちょうど陶器に陶工の手のあとがついているように、語り手の痕跡がしみついている³⁾。

ベンヤミン

I 序論——問題設定

ヴァレリーの歴史（学）嫌悪はその小説嫌悪と共によく知られている。歴史（学）というものをヴァレリーが見る視点は、たとえば、アナール派歴史学の創始者、マルク・ブロックとリュシアン・フェーヴルによって、一方で受け継がれ（というか、同時代性の共通な問題意識の延長線上において交錯する）、他方で批判されてもいる⁴⁾。彼らにしてみれば、歴史家としての形成過程において受けた伝統的な実証主義歴史学の方法論を折角、1929年の『社会経済史年報』創刊によって乗り越えようとしたときであっただけに、アカデミー・フランセーズ会員が前年の1928年に『歴史について』（1931年の『現代世界の考察』に所収）を発表し、さらに1932年に『歴史についての講演』を行なって歴史（学）への警鐘を鳴らしたことは、全面的に鼓舞されるというよりも、一種のとまどいをも課したのではなかったか。ブロックの『歴史のための弁明』⁵⁾にしても、フェーヴルの『新しい歴史へ向って』⁶⁾にしても、ヴァレリーに言及する彼らの反応は、共感と共に、癪にさわったようないらだちさを見せている。とりわけ、フェーヴルは次のように言う。「ヴァレリーは或る種の歴史——生憎、我々はそこに我々の不安の対象を認めることを拒否する——をかなり正当に裁いていた。彼の話を聴くまでは、例えば家庭における電燈の出現が、一時的な解決しかもたらさない外交会議より大きな歴史的事件であることに気がつかなかった愚か者に教訓

を施していた。全くのお笑い草で、我々の検閲官がくだらぬ歴史書しか読んでいないことは明白である。」⁷⁾要らぬお節介に対する憤りの声は聞きのがしようもない。歴史学を手仕事としている専門家の再批判の尻馬に乗って門外漢である作家をやり込めるのではなく、後者の歴史（学）批判がどのような形で構成されているかを、まず、批判的にたどり直してみよう。その途上でアナール派と比較することによって両者の問題意識の異同を考察し『固定観念』を歴史過程を通して読む基礎作業としたいと思う。

1) ヴァレリーの歴史認識批判——物理学へのまなざし

ヴァレリーの認識批判において鍵概念となるのが、小説に対するのと同様に、《恣意的なもの》(arbitraire) という概念である。「歴史（学）。恣意的なものに関する超一微妙な (ultra-délicat) 感覚によって私は歴史（学）に対して反感を抱く。ところで、いかなる歴史家も一時代、一国民^{ナシオン}（国家）、一種類の諸事実を選ぶ——そして、それで十分というわけだ。歴史（学）は、人間が繰り広げることのできる諸手段の充溢性においても、恣意的なものの充溢性、厳密性、率直さにおいても取り組まれたことが一度もない。歴史家たちは素材になんらの変更を加えることなく、ものを見、推測し、整理し、列挙する仕方に関りがないということを知らない。本当にはなにひとつ知らないこと、それが歴史家の性格である。」(PL. C. II. p. 1459 / V-768) ここで言われている《恣意的なもの》をヴァレリーがどのような意味で理解しているかをもう少し詳しく見ておく必要がある。『固定観念』より1年前の1931年に出版された『現代世界の考察』の「序言」で、ヴァレリーはヨーロッパ史の歴史書を読んで気づいたことは、歴史的事実の選択、そうした事実の持つ重要性の決定、追求された対象（目的）の明確な規定に関してなんら方法論が先行することなく、不確実な仮設^{アンティテ}と実体があるばかりだと述べ、次のように言う。「歴史（学）は、なんらかの証人の感覚のもとにたまたま降りかかることのできた事件、あるいは、状態の量を素材に持つが、われわれのところにまで伝えられ保存されている諸事実の選択、分類、表現は事柄の本性によってわれわれに課されているわけではない。そうした選択、分類、表現は本来であれば判然とした分析および決定の結果、出てこなくてはならない筈である。ところが、実際には、それらは、常に、われわれがその偶然的な、あるいは恣意的な性格について訝しく思っていないような習慣と伝統的なものの考え方、話し方に委ねられてしまう。しかしながら、われわれは、知の対象そのものに関する明確な考察から引き出され、観察＝観測 (observation)⁸⁾を思考の操作に、そして、こうした操作を作用上の権能 (pouvoirs d'action) に改めて直接結びつけるために正確に作られた特別の概念が、教育と習慣によって提供される最初の近似手段である日常言語に代わって使われる瞬間、認識のあらゆる分野において決定的なある進歩が宣言されるということを知っている。」(PL. O. II, p. 915) ヴァレリーにとって《恣意的なもの》とは、事実が歴史的事実として構成される際、事実の《選択、分類、表現》が《事柄の本性によってわれわれに課されていない》にもか

かわらず、《判然とした分析および決定》という手続きを経ていることにあると言うことができる。当然予測されるように、ヴァレリーがこのように表象する《恣意的なもの》は自然科学的方法論的過程に基づいている。歴史(学)における《事件》(événement)という概念の明確な規定の欠落と対比されて、はっきりと自然科学の歩みが強調される。「自然科学において3世紀このかた多様に試みられてきた諸研究がものの見方を改めて作り直し、研究対象に関する視像と素朴な分類に代わって特別に練りあげられた概念体系を使っている一方で、われわれは、歴史(学)－政治(学)の領域において、あいかわらず受動的な考察⁹⁾と無秩序な観察＝観測の状態のままなのである。」

(PL. O. II. p. 920)《原理、定義、幾何学、それから……悟性を手直しするために身を粉にしている》(PL. C. II. p. 1517 / XXIV-238) 物理学者像が歴史家像に対してひととき強調されることになる。ヴァレリーにとって歴史(学)が批判の対象となるのは、この学問が物理学とちがって厳密な論証形式を十分に行なわないままに、あたかも無媒介的に事実が歴史的事実として因果関係の中に構成され、そうして構成された歴史の歩みがまさに真理そのものであるかのように提供されるということにある。『歴史についての講演』(1932年)においてヴァレリーは言う。「ルイ14世が1715年に死んだということについては皆、同感です。しかし、1715年には観察＝観測できる事柄が他にも無数に起こっていたのですが、これらの事柄を文書の状態で保存するとすると、無数の語、本、そして図書館すら必要になるところでしょう。従って選択しなくてはならない、すなわち、単に事実の存在についてだけではなくその重要性についても取り決め(convenir)なくてはならない。しかも、この取り決め(convention)が肝要なのです。」(PL. O. I. p. 1130) こうして、《存在》、《重要性》の他に《年表》、《因果律》の《取り決め》を挙げて(PL. O. I. p. 1131)、ヴァレリーは判決を下す。「こうした取り決めはみな[歴史(学)においては]不可避のものです。私はこれらの取り決めを精神に対して明解なもの、意識的なもの、感じとれるものにしない[歴史(学)]の怠慢だけを批判するのです。私は、精密科学がその基礎を再検討し、最も入念にその公理を追求し、その公準に番号を付けてきたとき、自分自身に対して行なったことを人が歴史(学)のために行なってこなかったことを残念に思うのです。」(PL. O. I. p. 1132)

以上を要約すれば、ヴァレリーが歴史(学)批判において糾弾する《恣意的なもの》とは《取り決め》が存在することそのものにあるのではない。《取り決め》自体は歴史学だけでなく物理学のような精密科学にも存在している。そうではなく、《取り決め》を《取り決め》として厳密に定義し明確な形で提示すること——これこそ《恣意的なもの》の充溢性、厳密性、率直さ(PL. C. II. p. 1459 / V-768)の意味である——が存分に果たされないで歴史が語られることをヴァレリーは《恣意的なもの》と批判するのである。そこから、ヴァレリーの皮肉が生まれる。「歴史(学)は文学の最も素朴な形式である。」(PL. C. II. p. 1489 / XIV-829)「歴史家たちは(……)物語を作る。」(PL. C. II. p. 1517 / XXIV-238)

ところで、コリングウッドはデカルトが『方法序説』の中で述べた歴史に対する不信感を4つ

の論点にまとめている。「1) 歴史の現実からの逃避性。歴史家は故国を離れて生活する旅行者であり、自分の時代に対しては異邦人となる。2) 歴史に対する懐疑論 historical pyrrhonism。歴史の話は過去についての信頼できない説明である。3) 歴史は役に立たないとする観念。信頼できない歴史の話は現在に行動するために助けにならない。4) 歴史は空想的構成である。歴史家は過去を実際あった以上に素晴らしく見せることによって過去を歪曲する。」¹⁰⁾ 論点1)と3)に関しては後段で論ずることにして、他の論点2)と4)は《恣意的なもの》という視点からのヴァレリーの歴史(学)批判に十分あてはまると言ってよいだろう。コリングウッドの挙げたデカルトの4番目の論点を《実証的方法によって解決しようとするところから》ヨーロッパの近代歴史学が出發し、《過去はそれ自体が絶対的なもの》であり、《客観的な事実として存在》し、《史料的研究を通じて自らその姿を現わすと考え》、従って、《現在の思考様式によって歴史を解釈すること》は《誤り》であるとする実証主義的歴史学が形成され¹¹⁾ 政治的事件を特権化したのであってみれば、ヴァレリーの批判は確かにアナール派のそれと一致する。たとえば、ヴァレリーは、《フランス革命以降パリがフランスの生活において果たしてきたとてつもなく大きな、特異な役割》とか、《電気の発見およびその応用物による地球の征服》(PL. O. II. p. 919)とかいったような《持続》(PL. O. II. p. 919)を持った現象が伝統的な歴史学においては、その重要性にもかかわらず、《政治的事件》に比べて無視されてきたと不満を述べるわけである。アナール派の問題設定のひとつとして有名な《長期的持続》(フェルナン・ブローデル)の視点がヴァレリーのそれに重なる。しかし、少なくとも、アナール派をブロック、それも『歴史のための弁明』の著者とフェーヴル、それも『新しい歴史へ向って』の著者に限定して言えば、彼らは共に、物理学の厳密な論証形式への強調と対をなすヴァレリーの歴史(学)批判のもうひとつの契機、歴史(学)の政治的波及効果の危険性に対する警戒¹²⁾を言い落としている。このことはヴァレリーとアナール派の創始者との合流にもかかわらず、両者の分岐をも示す重要な転回点を構成している。以下ではこの転回点と改めてヴァレリーの歴史認識批判の認識論的基礎をとりあげて論究してみよう。

2) ヴァレリーの歴史認識批判——効果へのまなざし

《効果》というものに対するヴァレリーの《超—微妙な感覚》(PL. C. II. p. 1459 / V-768)はなにも歴史(学)に対してだけ偶然に発揮されるのではなく、そもそものはじめから、すなわち、『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法への序説』以来、一貫して作用している一種の選別機能である。たとえば、彼は極めて印象的な形で語っている。「この混乱した文学的世紀において紛糾および詩的嵐の稲妻そのものであり、その分析がレオナルドの場合と同様に神秘的な微笑のうちに時として完成することのあるエドガー・ポーは、諸々の効果についての心理学と確率の上に明晰な仕方であらゆる読者への攻撃を打ち立てたのである。」(PL. O. I. p. 1197) (強調は筆者) あたかも作者とは読者である敵に向かって勝利の凱歌をあげるため緻密な作戦を練る指揮官であるかのように見

るヴァレリー像が鮮明に刻まれている言葉である。《パスカルの手は私には見えすいている》(PL. O. I. p. 465) という有名な文句も、ある意味においては、このような戦術家的作家でなくてはなかなか発せられないものだ。《効果》、作品が読者に及ぼす作用に固執するということは、広義の意味において、それだけ《政治的》であるということに他ならない。《パスカルの手》と同じように有名な、「歴史(学)」というものは知性の化学が精練して作りあげてきた最も危険な生産物である」(PL. O. II. p. 935) という定式も効果への偏執的なまでの関心以外のものではない。ヴァレリーにとって歴史(学)が《最も危険な生産物》であるのは、《受動的＝情念的考察¹³⁾と無秩序な観察＝観測》(PL. O. II. p. 920) を通して歴史の真実を語る歴史家の方法論的怠慢のせいばかりでなく、そのようにして語られた歴史がある特定の読者の情念と相乗効果をあげてかれにアイデンティティを確信させ、政治的行動にまで走らせかねないからである。露骨に政治的行動へと駆り立てる目的で語られるジャーナリストの歴史書にせよ、表面的には政治とは無縁の形で客観的に語られる講壇歴史学者の歴史書であれ、それが一旦、読者の前に提供されたとき、歴史が読者をますます盲目にし、プロパガンダの道具として機能しかねない危険性をヴァレリーは見ているのだ。《タキトゥス、ミシュレ、シェイクスピア、サン＝シモン、バルザックの描く絵＝歴史描写》は《読者に対して及ぼす瞬時の効果》という点では区別の仕様がな(PL. O. II. p. 916) と皮肉のヴァレリーは、そのような効果を次のような形で分析する。「歴史(学)という芸術のこうした美しい果実を堪能するだけでよいのだろうし、これらの果実をどう利用しようと、いかなる反論も差しはさむことはないのだろう、もしも政治がそれに全く影響されないのであれば。過去というものは、多少なりとも空想的であり、あるいは、事後に多少なりとも組織されたものであるが、現在時そのものの持つ(潜^{ビュイサンス}勢)力に比すべき(潜勢)力を未来に対して働きかけるものである。諸々の感情と野望は、今現在の知覚と所与から結果として出てくるといふ以上に、読書の思い出、思い出の思い出によってかき立てられる。歴史学の実際上の性格は歴史そのものに参加することである。過去という観念がある意味を帯びある価値を構成するのは、自分自身の中に未来についてのある情念(passion)¹⁴⁾を見出している人間にとってだけである。未来は、定義上、影像を持たない。歴史(学)はそういう未来に思考されるための諸手段を与える。(中略) 一人の人間あるいは一つの議会が切迫した、乃至は、当惑させるような情勢にとらえられて、働きかけること(行動すること)を余儀なくされるとき、彼等は事態そのものをそれまで決して現出したことがなかったものとみなして熟慮するというよりも、想像上の思い出に相談する。ためらいがちな思考は、一種の最小作用法則(loi de moindre action)に従い、状況の独自性に対して創造し、そうして案出したものによって答えることを嫌がって、自動症(automatisme)¹⁵⁾に近づく傾向にある。全く新しい事例(症例)に対してまさしく対処することが問題であるというときに、この思考は先例を願ひ出て、まず第一に思い出すようにと仕向ける歴史精神に身をゆだねるのである。」(PL. O. II. p. 917)

このように批判的に語るヴァレリーは、コリングウッドがデカルトの歴史不信として掲げた残りの2つの論点、歴史（家）の現実逃避性と歴史の非有用性には全く与しない。与しないどころか、歴史（学）の危険性を、逆に、歴史（家）あるいはその読者の政治的現実への参加と歴史の有用化に置いているのである。たとえ、ヨーロッパの近代歴史学が歴史の非有用性の論点を《継承》し、《現在のための教訓として歴史を探究すること》は《誤り》とみなした¹⁶⁾にせよ、歴史（学）の政治への転用およびその弊害をヴァレリーは突いている。

フェーヴルが《我々の検閲官》であるヴァレリーに対して《全くのお笑い草で》、《くだらぬ歴史書しか読んでいないことは明白である》と、まるで吐き捨てるように断罪したとき、検閲官は裁判官に向かって答えただろう。「なるほど、私が読んだ歴史書は皆くだらぬ代物であったかもしれませんが。しかし、そういうくだらぬ代物がこの第3共和政の政治過程において現にプロパガンダの効果を強力に及ぼしていることは否定できません。ことは、象牙の塔の問題ではないのですよ……」。

時代は、少なくとも、すぐ上で引用した文章を含む『現代世界の考察』が出版された1931年を軸にすれば、ヨーロッパにおいて大衆デモクラシーと呼ばれる新たな政治的段階をすでにむかえていた。《全く新しい事例（症例）》を経験しているこの時点で、イタリアにムッソリーニのファシズム政権はすでに成立しており、2年後——その間に『固定観念』（1932）は出版されている——にはドイツにヒトラーのナチズム政権が誕生するという具合に、全体主義の独裁制が、言わば、『固定観念』をはさみ打ちにすることになるだろう。ノイマンによれば、第一次世界大戦以前の独裁制とそれ以降の独裁制が本質的に異なるのは、前者が《一時的な非常事態における支配形態》であり、《民主制と両立しうる》限りにおいて《安全弁》としての立憲的独裁制であったのに対し、後者は《単なるデモクラシーの規範からの一時的離脱》ではなく、《独裁制の創造者の死後も存続し、その「全体主義的支配」の勢力を人間のあらゆる利害関心および活動の範囲におよぼす、一つの政治機構》であった。《大衆民主政の出現と、伝統的諸制度の崩壊のおそれ》を《歴史的前提》として生まれた《今日の独裁制はデモクラシーと全く相反する理念を代表するとはいえず、デモクラシーの欠陥の直接の産物》¹⁷⁾なのである。ヴァレリーの歴史（学）批判は認識論的批判であると同時に、あるいは、それ以上に、第3共和政下の大衆デモクラシーの生態を視野に収めた政治状況論であって、これを見落とすことはやはり怠慢の誹りを免れないだろう。このことは、政治状況を見据えるヴァレリーのまなざしがパスカルの手を見据えるまなざしと《効果》を中心点にして同心円を描いているということを示すものである。ブロックとフェーヴルがヴァレリーの歴史（学）批判に純然たる学問領域での認識批判しか見なかったのに応じて共感するだけでなく反発することになった経緯も、これによって説明することができる。つまり、その批判は政治状況を踏まえることによって一方で、正当にも伝統的な実証主義歴史学への批判たりえているが、政治状況論でもあることによって他方で、共通な視点から旧弊な歴史学を批判する新しい歴史学の動向を見

落とす破目になるという風に。ところで、ヴァレリーに対しては、そのまなざしが第3共和政下の政治過程を背景にしてそこに歴史(学)を布置することによって状況と学問との相互作用の方向けられているのに応じて、その歴史(学)批判は認識論的レベルにおいても政治状況論のレベルにおいてもある種の徹底性を欠いていると言わねばならない。ヴァレリーのように歴史学を自然科学、とくに、物理学に比較するとき、比較の構成要素となっているのは、単に、歴史学が物理学と比べて方法論的厳密性の面で立ち遅れているという確認事項だけであって、そもそも何故、歴史学と物理学との比較なのかという根本的な問いが認識論一般の場において論理構成として提起されていない¹⁸⁾。次に、歴史学をより堅固な方法論的前提に捉えるためにヴァレリーの批判を受け入れ彼が満足するような厳密な論証形式に基づいた歴史学が可能になった場合を想定しても、そのような歴史学が、果たして、ヴァレリーが危惧するように政治過程にからめ取られプロバガンダの理論的根拠に転用されないかどうか保証のかぎりではないだろう。少なくともヴァレリーの論理は、《神話のない政治はない》(PL. O. II. p. 921)と断言するにせよ、歴史書の批判的読書を勧告する(PL. O. I. pp. 1133-4)(PL. O. II. p. 917)にせよ、政治状況と歴史学のいびつな浸透効果、あるいは、一般的に政治と学問との連携を突き崩しうるような可能性を論理構成の形で明確にしていないのである。このように不徹底な認識論の構造は、ヴァレリーが歴史学を物理学に対比させて批判する過程で、さらに一步、歴史学にとっても彼自身の批判的論理にとっても致命的な一步を踏み出すとき、收拾のつかない矛盾として露呈するに至るだろう……。「歴史家は決して次のようには言わない：私があなたたちにこれから語ろうとすることは、これこれしかじかの資格を備え、これこれしかじかの地点にX時間かX日…それともX世紀の間、位置している観察者＝観測者を前提にしている！彼の眼はこれこれしかじかの大きさを持ったこれこれしかじかの事実に合うように調節されていて——こちらのこと（たとえば、歴代の治世）に敏感であって、あちらのことには敏感ではない、と。——歴史家がこんなことを言うとするれば、それは歴史(学)を破壊することになるだろう！歴史(学)を破壊することなくそこから捏造方式を取りはずすことはできないのだ。精密さが歴史(学)を根絶する。(……)」(PL. C. II. p. 1500 / XXII-917)観察者＝観測者を歴史家に、観測すべき系の状態を歴史家の扱う時代と地域に、観測装置を歴史家の眼に、それぞれ対応させた極めて素朴なアナロジーを見てとることは容易であるが、とにかく、ここに至ってヴァレリーは、それが現実問題として妥当するかどうかを問わないとするれば、歴史(学)殺しとも言うべき事態を想定している。それは一見、過激^{ラディカル}に見えて、実は、根底的ではない。その根拠を言う前に、そして、それだけ一層明確なパースペクティブの下で考察するために、少し回り道をしなくてはなるまい。ヴァレリーが歴史認識においても量子力学を含めた物理学においても観察＝観測にこだわるのは偶然ではない。逆に、そのような拘泥こそヴァレリーが終生追求した自己意識の可能性という問題設定から、ある意味で必然的に導出されるものである。この問題設定において精神の機能の仕組みを解き明かすため自然科学の理論的成果をモデル

にしたことは周知のことだろう。たとえば、1900年のカイエはこの指摘を裏付けている。「規則正しい認識、すなわち、科学認識を受け入れるのは精神的現象それ自身ではない——というのも、これらの現象は個物（特殊）的（particuliers）であるからだ、科学認識を受け入れるのは、むしろ、そうした現象の不変量（invariants）であり、現象を支えるものであるべきだろう——すなわち、これらの現象において緊張力（tensions）、位置、変動（variations）、変形（déformations）として現われるもの。しかし、ここでは観察＝観測は観察＝観測されるものと同じ領域に属し——それらの関係は知られていない。」（PL. C. I. p. 878 / I-863）ここからヴァレリーがハイゼンベルクの不確定性原理に関心を寄せる（cf. PL. C. II. p. 869, p. 871）のもなんら不思議ではないが、ここでとりあげたいのはそのようなことではない。むしろ、ヴァレリーが科学認識を精神的現象に適用するとき、《個物》（particulier）としての《精神的現象それ自身》ではなくその《不変量》が問題となっていることである¹⁹⁾。ところで、イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグは《ガリレオの物理学に基づいた科学的範例》、《ガリレオの物理学自体よりも長い生命をもつことになった》範例として、《ガリレオ的範例》^{パラダイム}を指摘している²⁰⁾。この《ガリレオ的範例》は《数量化と現象の反復性をそれぞれ前提》にした《数学と実験の手法》によって構成されている²¹⁾。ヴァレリーによる精神的現象の《不変量》選択は、ギンズブルグの言う《ガリレオ的範例》を本質的に規定する《数量化と現象の反復性》に基づいている。言い換えれば、ヴァレリーは《ガリレオ的範例》の根本的要請を確認した上でそれを自分自身の関心領域である内面的観察＝観測（自己意識）に適用していることになるだろう。ギンズブルグは先程の《ガリレオ的範例》に《推論的範例》を対置する²²⁾。後者は、《何よりも性質に関係し、対象とすべき個別の事件、状況、資料をあくまでも個別のものとして扱う》²³⁾。つまり、《推論的範例》は《現象の反復性》を本質的契機として要請しない。この《推論的範例》に基づく知には古い、医学、文献学とともに歴史学も含まれるとギンズブルグは言う²⁴⁾。そして、歴史学は《推論的範例》を前提とすることによって、この範例とは両立しない《現象の反復性》を前提とする《ガリレオ的科学》になり得ない²⁵⁾。1932年の『歴史についての講演』の中で、《歴史学というのは反復することのない事柄に関する科学＝学問です。反復する事柄、再び行うことのできる実験、重ね合わされる観察＝観測は物理学と、ある程度、生物学に属する》と言ったのはヴァレリーその人である。そのヴァレリーが歴史（学）を物理学をモデルにして批判し、さらに、前者の存立そのものを否定する極限状況にまで想をはせていたことはすでに見た通りである。ヴァレリーの認識論レベルにおける歴史（学）批判がその脆弱な構造を露呈するのはここである。まず、歴史学を物理学に比較し後者の方法論的優位を強調することによって前者の後進性を批判することは、ギンズブルグの2つの範例の根本的差異を無視することに他ならない。しかも、それは、ヴァレリーがまさにギンズブルグと同じように《現象の反復性》との関係において歴史学と物理学を区別していたにもかかわらず、である。次に、物理学における観測過程を参照することによって当の歴史学を抹殺することは、歴史学と物理学を批判的に比較した自らの試みの意味そ

のものを自らの手で廃棄することに等しい。ヴァレリーが物理学に比べて歴史学の概念操作における厳密な運用の欠如を言うとき、歴史学者に改めて歴史認識の素朴さと歴史記述の曖昧さに対して反省を促し、より緻密な認識と記述へと向かわせようとしただけにすぎないと考えることは、勿論、可能である。しかし、ヴァレリーの歴史（学）批判がそれ自体の中にアポリアを含んでいることは否定できない。なぜなら、《ガリレオ的範例》（物理学）と《推論的範例》（歴史学）の区別を知っていながら、その区別を《取り決め》として明示し、その上で後者の認識論的厳密化の可能性を精緻に追求しているわけではないからである。歴史（学）は科学か？という古くて新しい問題に対するヴァレリーの接近方法は、歴史認識批判の面で妥当性を持つにしても、論理構成の面において、まさしく、《恣意的なもの》である。

だが、『固定観念』との関係からヴァレリーの歴史認識批判については是非とも一言触れておきたいことがある。『固定観念』の《医者》は夢を話題にした文脈の中で、「これぞ流行の現象ですね！……そのうち医学部に夢占い（Oneiromancie）講座ができるでしょうよ。（……）」²⁶⁾と皮肉っている。これは1926年にフロイトの『夢判断』が仏訳されパリ精神分析協会も設立され、さらに、パリの大学と病院に精神分析が採用されたことを踏まえた発言である²⁷⁾。

ギンズブルグは《ガリレオ的範例》に對置した《推論的範例》の淵源を人類の原初的社会形態である《狩人》の思考形式の中に見ている。すなわち、《いくたびも獲物を追求するうちに、泥に刻まれた足跡や、折れた枝、糞の散らばりぐあい、一房の体毛、からまりあった羽毛、かすかに残る臭いなどから、獲物の姿や動きを推測することを学》び、《絹糸のように微細な痕跡を嗅ぎつけ、記録し、解釈し、分類する》²⁸⁾狩人の思考形式である。ギンズブルグはこのような狩人的・推論的範例に属するものとして、イタリアの目ききモレッリ、イギリスの探偵小説家コナン・ドイル、そしてフロイトの《三幅対》を仕立てる²⁹⁾。ヴァレリーの歴史認識批判の契機がフロイトの精神分析という《狩人的・推論的範例》の学問領域と交錯する。反フロイト的立場をとるヴァレリーが認識論の平面で当のフロイトと図らずも出会うことになるわけだ³⁰⁾。『固定観念』の《医者》によって揶揄されたフロイトの『夢占い』、いや『夢判断』ではないにしても、《絹糸のように微細な痕跡を嗅ぎつけ》て、出会いの可能性を探ってみよう。

フロイトは『精神分析入門』第1部第1講序論において、解剖学、外科学といった医学の他の領域では《示説教育》が実践されているのに対して、《分析を受ける者と医師》との間に、ちょうど『固定観念』がそうであるように、《言葉のやり取りがあるだけの》精神分析では《傍聴者の介入を許さない》という特異な条件を指摘する。これは事件（患者と医者との言葉のやり取りと、それを通しての診断・治療）と証人（観察者＝観測者としての医者）の問題である。フロイト自身は事件と証人という言い方をしていないにせよ、分析者が被分析者について行う報告にどこまで信憑性があるのかという疑問点を察知して、アレクサンドロス大王に関する歴史学者の講演（『精神分析入門』は聴講者を前にした講義であるため）の場合を仮定する。アレクサンドロス大王を直接

知っていたわけでもない歴史家の当の報告に信憑性はあるのかというわけである。結局、フロイトは歴史家が嘘の報告を行ってまで聴衆を言いくるめる理由がないこと、史料の参照の2点をあげて歴史家の報告に信憑性を与える。それによって分析者の報告である精神分析理論も信憑性を保証されることになる³¹⁾。ヴァレリーの方はたとえば、少なくともここでのフロイトと比較するなら、もう少し厳密であった。「歴史(学)は、なんらかの証人の感覚のもとに降りかかることのできた事件あるいは状態の量を素材に持つが、われわれのところまで伝えられ保存されている諸事実の選択、分類、表現は事柄の本性によってわれわれに課されているわけではない。」(PL. O. II. p. 915) そうすると、パリのアカデミー会員はウィーンの精神分析者に対して、歴史認識のレベルと精神分析のレベルにおいて批判する余地を残していることになるだろう。さらに、フロイトは精神分析の真実性を確信する手段の1つとして各人の《自己観察》に訴える³²⁾。ヴァレリーは精神の現象に物理学の方法を適用し、観察=観測過程のその対象との関係(ハイゼンベルクの不確定性原理への参照)を追求していた。すなわち、自己意識の問題化であった。心的現象を意識の方から、言わば、高い方から研究する者が、同じ現象を逆に無意識の方から、言わば、低い方から研究する者に対して自己観察=観測の問題は一旦そこに足を突っこめば、ことほどさように簡単ではないと批判する余地も残されていることになるだろう。

以上、ヴァレリーの歴史(学)批判が孕む2つの問題点(認識論的レベルおよび政治過程と歴史(学)の相互浸透効果のレベル)を批判的に論究し、さらに、フロイトとの連関性をも指摘した。精神分析に関しては以下の本論に譲ることにしてヴァレリーの歴史(学)批判、とくに、政治状況論的批判に関しては、彼の極めて興味深いテキストの見方に連結させて考察し、それ以て序論の締めくくりとしたい。

3) 《テキストの機能》

1938年に1冊の本が出版される。『フランス人とモロッコ人が交わす芸術についての対話』を言う。作者はヴァレリーの友人ピエール・フェリーヌである。これにヴァレリーは序文を書いている(PL. O. II. pp. 1036-9)が、その中で、友人の書物を《テキストの機能》という言葉を使って紹介する。ヴァレリーはこの《テキストの機能》という視点を思いつかなかったら、序文など書いてはいなかっただろうと断言しているので、相応の意図があつてのことである。「現代世界がかかえる政治の問題の中でも最も困難な問題、明日になれば最も深刻な諸問題の中のひとつとなるような問題を、芸術についての対話篇をめぐって喚起しなければならないというのは注目に価することであり——思わぬ共鳴と接近に満ちた現代に恐らくかなり特徴的なことだろう」(PL. O. II. p. 1036)とヴァレリーが言うように、《テキストの機能》とは、一見したところでは政治状況と何の連関もないかに見える芸術論をまさしく政治的・歴史的過程の中に配置してこのような連関の下でテキストを読むとすれば、テキストはいかなる意味を持ちうるかという問題提起に他ならない。

そして、ヴァレリーの言う政治的・歴史的過程は、ヨーロッパ列強による帝国主義的植民地化政策の推進を指し、その過程でヨーロッパ人が被植民地国あるいは保護領国の原住民に《与える》(教える)ことはできても反対に《受け取る》(教わる)ことは何もないとみなしてきた優越感の偏見を意味する。このような優越意識の一方通行性を再検討することによってヨーロッパ人と非ヨーロッパ人との間の伝統的な上下関係を打破する可能性を探る——それが現代世界において最も困難な、最も深刻になるのが予想される政治問題であるとヴァレリーは言う——試みとしてフェリーヌのテキストを紹介するというわけである。ここには歴史(学)批判におけるヴァレリーの効果へのまなざしが定位されているということを改めて指摘する必要があるだろうか。本論文が目指すのは、ヴァレリー自身が試みた《テキストの機能》という視点を当のヴァレリーの作品、『固定観念』に適用することである。その適用を通して、しかし、ヴァレリーの実践とはちがって、テキストを無瑕な実体として流通させるのではなく、構成されたある歴史過程の中で『固定観念』というテキストがどのような作用を受け、どのような意味連関を形成してゆくかを論究することである。

バフチーンは《多くのほのめかし、あてこすり》³³⁾を持つラブレールの小説の研究方法として《3世紀にもわたって支配的位置を占めていた》《歴史的・アレゴリー的方法》³⁴⁾を批判しているが、その方法を次のように要約する。「[歴史的・アレゴリー的方法の本質は]ラブレールの描くものすべて——人物でも事件でも——の背後に、歴史上あるいは宮廷に実際にいた特定の人物、実際にあった特定の出来事があるということなのである。小説全体が全体として歴史的 ^{アリユージョン} 暗示の体系となる。この方法は、一方では16世紀以来の伝承に基づき、他方ではラブレールのイメージとその時代の歴史的事実とを対照し、またありとあらゆる推量、比較を行なって、この暗示、あてこすりの謎を解くのである³⁵⁾。」外見上の比較をすれば、1932年の『固定観念』にも『ガルガンチュア物語』、『パンタグリユエル物語』と同じように《多くのほのめかし、あてこすり》がある。おまけに、特異な造語を案出した作家の例としてモリエールとともにラブレールの名が挙がってさえもいる³⁶⁾。従って、ヴァレリーの作品を《テキストの機能》という視点から歴史過程との関係において読もうとするとき、バフチーンの批判する歴史的・アレゴリー的解釈方法の誘惑力はある意味でそれだけ強いと言わねばならない。しかし、今からせいぜい半世紀以上前の作品にラブレールの場合のような《伝承》がまわりついている筈もない。また『固定観念』を《全体として歴史的 ^{アリユージョン} 暗示の体系》(強調は筆者)と前提する意図もない。後に続く本論の各章において、それでも敢えてヴァレリーの《イメージとその時代の歴史的事実とを対象》するにしても、《暗示、あてこすり》の謎解き自体が問題なのではなく、バフチーンが批判した歴史的・アレゴリー的方法の場合のように、《表現されたイメージの芸術的・イデオロギー的理解》を等閑に付す³⁷⁾ことは許されないだろう。テキストと歴史過程の重ね合わせは、それがほのめかしに促されたのであれ何であれ、読み手の視点そのものに依拠しているのであって、文献学の厳密な実証的事実確定に基づいているのではない。ソシ

ユールが実体論的思考方法を批判して言ったように、「はじめには視点の他には何もない。その助けを借りてそのあとで客体を創造するのである³⁸⁾。」このような意味で理解された視点において《テキストの機能》というヴァレリーの要請をその『固定観念』に突き合わせるとき、イーグルトンの言う《テキストによって意識的に提起された問題ではなく、ある種の読みによってテキストそのものから引きだせる問題、つまりテキスト自体が意識していない問題³⁹⁾》こそ究明しなくてはならないだろう。本稿は、第3共和政の命運とほぼ同じくしたフォルマリスト＝ヴァレリーの、注文生産とカイエ執筆という2重の文学生産様式をその2重性において、歴史過程との弁証法的連関のもとに、どのように把握するかと問われわれの最も根本的な問題設定のためのささやかな一歩にすぎない。今、ここにおいて、このような問題設定からはずれてヴァレリーを読むことは、われわれから程遠いと言わなくてはなるまい。

注

- 1) 本稿はこの題目のもとに同じく京都大学フランス語学フランス文学研究会発行誌『仏文研究』(1987年18号)に所収の拙論(《Autre chose》あるいは《ex(-)pliquer》——『固定観念』のフォルムを読む——)と組になる予定であるが、今回は、その序論だけを載せることにする。
- 2) Paul Valéry : *Œuvres II*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1970, p. 563. 以下, PL. O. II. p. 563.
 という形に略し、ヴァレリーの引用に関しては引用文の最後に付すことにする。
 ヴァレリーの他の出典についても同様の略式を使う。すなわち、
 PL. O. I. → Paul Valéry : *Œuvres I*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1975.
 PL. C. I. → Paul Valéry : *Cahiers I*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1976.
 PL. C. II. → Paul Valéry : *Cahiers II*, 《Bibliothèque de la Pléiade》, Gallimard, 1974.
 プレイアード版カイエについてはC.N.R.S.版カイエの巻数(ローマ数字で示す)とそのページ(アラビア数字で示す)を付す。
 なお、引用文中の強調は、特に断らないかぎり、原著者のものである。
- 3) ヴァルター・ベンヤミン著作集7『文学の危機』, 晶文社, 1985年, p. 192.
- 4) アナール派に関しては次の著書を参考にした。
 二宮正之『全体を見る眼と歴史家たち』木鐸社, 1988年。
 マルク・ブロック『比較史の方法』高橋清徳訳, 創文社歴史学叢書, 1986年(特に訳者解説)
- 5) マルク・ブロック『歴史のための弁明——歴史家の仕事——』讃井鉄男訳, 岩波書店, 1979年。特に、同書のV I V, p. 47.
- 6) リュシアン・フェーヴル『歴史のための闘い』長谷川輝夫訳, 創文社歴史学叢書, 1977年に所収。
- 7) フェーヴル, 同書 p. 134.
- 8) 物理学, 特に量子力学において観測という言い方が好まれているので、敢えて煩瑣を省みずこのように訳しておいた。
- 9) 原語は《consideration passive》。《passive》は《passion》との関係から《受動的》の他に《情念的》という訳語を添えるべきかもしれない。原文ではその前(PL. O. II. p. 917)に、《過去という観念がある意味を帯びある価値を構成するのは、自分自身の中に未来についてのある情念(passion)を見出して

いる人間にとってだけである」と書かれているからである。

- 10) 斉藤孝『歴史と歴史学』東京大学出版会、1982年、pp. 9-10.
- 11) 斉藤孝、同書 p. 10.
- 12) これは、柴田三千雄「ヴァレリーと歴史」（筑摩版ヴァレリー全集12『現代世界の考察』月報12）ですすでに指摘されている。
- 13) 注9）を参照。
- 14) 同じく注9）を参照。
- 15) 今回は載せられなかった本論においてこの用語をめぐる考察することになる。
- 16) 斉藤孝、前掲書。p. 10.
- 17) シグマンド・ノイマン『大衆国家と独裁——恒久の革命——』岩永健吉郎、岡義達、高木誠訳、みすず書房、1983年、p. 12.
- 18) もう少し後でカルロ・ギンズブルグに言及した箇所を参照。
- 19) ヴァレリーは恐らくスコラ哲学の定式——《non est scientia de individuo》——を踏まえているのだろう。この定式はフランス語では《il n'y a pas de science du particulier》という形で表わされる。cf. Paul Foulquié et Raymond Saint-Jean : *Dictionnaire de la Langue philosophique*, PUF. 1978. p. 516.
- 20) カルロ・ギンズブルグ『神話・寓意・徴候』竹山博英訳、せりか書房、1988年、p. 195. なお、ギンズブルグはなにも、ガリレオの物理学が今となっては完全に無効になったと主張しているわけではない。
- 21) ギンズブルグ、同書、p. 195. なお、ギンズブルグは同ページでガリレオの科学は《「個別については語りえない」というスコラ哲学的警句を我がもの》にしたと述べているが、この警句は注19)にラテン語で引用したのと同じのスコラ哲学的定式のことなのかは目下のところ不明である。
- 22) ギンズブルグは《推論的範例》を《狩人的範例》、《易占的範例》、《症候学的範例》と様々に呼びかえている。同書、p. 214. なお、ギンズブルグは《ガリレオ的範例》と《推論的範例》の対比はあまりにも図式化すぎるということを承知している。同書、p. 196.
- 23) ギンズブルグ、同書、p. 195.
- 24) ギンズブルグ、同書、pp. 193-5. なお、ギンズブルグは文献学に関しては留保をつけている。同書、pp. 196-8.
- 25) ギンズブルグ、同書、p. 196.
- 26) Paul Valéry : *L'Idée fixe*, coll. 《Idées》, Gallimard, 1966, p. 63.
- 27) 注1）で言及した拙論 p. 147, pp. 174-5 参照。
- 28) ギンズブルグ、前掲書、p. 189.
- 29) ギンズブルグ、同書、p. 215.
- 30) フロイトとヴァレリーの出会いの可能性については、『テスト氏との一夜』の極めて啓発的な読みである山田広昭氏の論文「ポール・ヴァレリーと精神分析——『テスト氏との一夜』をめぐる——」（神戸大学「近代」発行会「近代」第65号1988年12月）を参照。
- 31) フロイト『精神分析入門』（著作集1）懸田克躬・高橋義孝訳、人文書院、1983年、pp. 10-3.
- 32) フロイトはすべての自己観察が精神分析理論を補強するというわけではないと断っている。同書、p. 13.
- 33) ミハイール・バフチン『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳、せりか書房、1980年、p. 98.
- 34) バフチン、同書、p. 102.
- 35) バフチン、同書、p. 100.

- 36) Paul Valéry : *L'Idée fixe*, p. 77.
- 37) バフチーン, 前掲書, p. 101.
- 38) フレドリック・ジェイムソン『言語の牢獄——構造主義とロシア・フォルマリズム——』川口喬一
訳, 法政大学出版局, 1988年, p. 14.
- 39) テリー・イーグルトン『クラリッサの凌辱——エクリチュール, セクシュアリティ, 階級闘争——
』大橋洋一訳, 岩波書店, 1987年, p. 160.